しといふ、又一種花形同斷にて、白地に紅のさらさとびいり有、さらさ花びしといふ、又一種櫻色にてやゑにひらくあり、やゑ花びしといふ、又一種花形切りさきて、せんやう白花有、はぐまといふ、右何も花形異風にしてかはりたる物也、總名をいぎりすといふ、せきちく也、

咲分白菖　花形つねのあやめなり、花白地にあさぎ色のさらさ、さきわけのごとくにあり、四月咲、

鷹羽白菖　花はつねのあやめにて、むらさき色、四月さく、葉に鷹の羽のごとくなるもやうあり、

琉球菖蒲　花形丸く極大りん、指渡し曲尺八九寸餘迄、花中のくもでほこ花かつこうよりちいさく異形也、うす紫のうすくきゝやう色也、五月咲、葉大く長く高さ六七尺ほどまで立のびる、琉球國より種來るよし、

〔增補地錦抄八〕せきせう　せきせうはたくさん成物にして、又よきせきせうはすくなし、其品さまざま有る中にも、鎌倉せきせうといふを上とす、先植樣はひりの木にてまげたる器物か、又は手水たらいのそこに水ぬけの穴をほり、しのぶ土に合、肥少ませ、右の器物に一はい入れ、中の少し高樣にならして、さてせきせうの根を水にてあらい、根の長さ一寸ほど置て切てすて、器物の中より段々植て、日かげ成所に上にすだれをかけて置く、成ほど去げく植たるよし、四五月に植たるは、來年の三四月に、器物をやぶりすて見れば、白き根計になりてからむ、水鉢に入葉をすかし、箸にて葉をなでつやを出す、箸にてなづるに心得あり、先づ箸のさきをほそくけづりて、やわらか成紙をまき、清き水にひたしてせきしやうの根本より、葉すへまでなづる、葉末外へねたるは內へ成やうに、又內へまがりたるは外へねせる樣に箸をつかふ、手心大節なり、時々手かけて去るべし、とかく毎日箸にてなづれば、葉色いさぎよくなりて、去やんとする物也、つねに水をつけて置ば、根やわらかになりてわるし、葉末より赤くかるゝも、水のすぎたるゆゑんなり、但水を